

CONTENTS 目次

- 2 特集 TAKIBI ここから始まる、それぞれのストーリー
- 16 応援大使・ヤイタゴハン ほか
- 18 子育て・図書館へGO！ ほか
- 20 ニュース&トピックス
- 23 はつらつ通信
- 24 市からのお知らせ
- 32 ゆかりびと・編集後記

COVER 表紙の写真



「表紙に焚き火の写真はどう？」と提案いただき、数時間後にこれだけの方が集まり、マシュマロまで準備。笑顔で楽しむ皆さんを撮影できました。つながる力・行動力・遊び心など…。TAKIBIの魅力が詰まった一枚となりました。

POPULATION 人口 (11月1日現在)

29,709人 (△ 8)	出生	9人
男 14,843人 (△ 4)	死亡	35人
女 14,866人 (△ 4)	転入	80人
13,360世帯 (3)	転出	62人

() 内は10月1日との比較 ※住民基本台帳をもとに算出
△は減

特集 TAKIBI

ここから始まる、それぞれのストーリー



学生団体 RISE 代表
トビタテ!留学 JAPAN 高校生コース 8期生
立命館アジア太平洋大学 高校生特命サミットメンバー
矢板東高校 2年
辻岡 千宙 さん (18才)

先生や友達が好きだけど学校が楽しくなかった
勉強も部活も
私の好奇心を満たしてくれなかった
無気力な毎日に疑問を感じ
休学し、長期留学に挑戦
帰国後、再び高校生活に戻り
そして
TAKIBIに出会った――
「今やりたいと思ったことを やったらいんだよ」
「学ぶ場所、学び方は自由だよ」
「ここでやれること、やってみようよ」
TAKIBIと出会う
スタッフがくれたメッセージは
私の心に
情熱の火を灯してくれた――



矢板ふるさと支援センターTAKIBI

焚き火に自然と人が集まり
語り合うように、
人が集い、
つながりをカタチにする場所——

みんなの手作りで誕生した「TAKIBI」

2018年、地域をつなぐ新たな居場所として、「矢板ふるさと支援センター TAKIBI」が誕生し、まちづくりを活性化させる大きな挑戦が手探りの中で動き出しました。

運営スタッフは、都市部から移住してきた地域おこし協力隊と、地域の実情に詳しい集落支援員。いずれも国の地方創生制度により、就任しました。

拠点となったのは、矢板駅西口エリアでかつて旅館として使われていた建物の一角でした。彼らに与えられた最初の任務は、「リアルな居場所づくり」。壁や天井を壊し、塗

装し、床板を貼り——。現在の TAKIBI で使われているテーブルや家具も、当時のメンバーがDIYで手作りのものです。メンバーのほとんどが専門知識のない素人ばかりでしたが、地域の職人さんなどに助けてもらいながら作業を進め、約3カ月後、ついに「初代 矢板ふるさと支援センター TAKIBI」がオープンしました。



▲初代 矢板ふるさと支援センター TAKIBI (扇町一丁目)



▲初代 TAKIBI スタッフの皆さん

官民が連携したまちづくり

その後 TAKIBI は、2022年8月に現在の場所、駅東口の商業施設「ココマチ」1階へと移転しました。同年4月には、2階に地方創生をテーマとしたシェアオフィス「スロワーク」がオープンしたばかり。これまでの移住定住相談やシェアスペース運営などのほかに、スロワークと連携した企業誘致や関係人口の創出も期待でき、ここを拠点とした官民連携のにぎわいづくりが始まりました。

「TAKIBI」という名前には、地域づくりに携わる人の心に火を灯すという矢板ふるさと支援センターの理念が込められています。人と人が自然に寄り添い、つながりが広がるコミュニティこそ、まちづくりの力。TAKIBIやスロワークでは、スタッフの想いと地域の温かさが混じり合い、さまざまなコミュニティが芽生え、広がってきました。

その中で生まれた出会いの数だけ、スタッフにも利用者にも、それぞれのストーリーが紡がれてきました。



問い合わせ/
矢板ふるさと支援センター TAKIBI
☎ (47) 7017



Instagram

利用者のストーリー

利用者の皆さんに TAKIBI でのストーリーを伺うと、そこには一人ひとりが大切にしている“想い”が見えてきました。

音楽 × 地域 × 楽しむ

東京から移住した際に知り合った集落支援員とのご縁をきっかけに、TAKIBIで「アフタヌーンジャズ」という演奏会を開くようになりました。ジャズと聞くと「少し敷居が高い」と感じる方もいるかもしれませんが、私たちが大切にしているのは“音を楽しむ”ということ。心地よい音色に身を委ねて眠ってしまう方、リズムに合わせて体を動かす方、音に誘われて立ち寄る方——。それぞれの“楽しい”をみんなで共有しながら、自由に安らげる空間を生み出していかれたらと思っています。

アフタヌーンジャズ

日時 / 12月13日(土)
14:00 ~ 16:00



篠原 晃治さん・京子さん

多世代が集い、絆を育む

2年前から実家のある矢板と東京の2拠点で生活をしながら、東京では多世代型の子ども食堂を続けています。「矢板でも同じような活動ができたら」と社会福祉協議会に相談したところ TAKIBI につないでいただき、実現することができました。カフェの運営については、地域の皆さんにご協力いただき、食事を提供しています。

サロンでは、一人暮らしの方や子育て中の方、障がいのある方など、どなたでも参加できるように講座内容を工夫しています。これまで、ポッチャ体験、笑いヨガ、介護講座など、市民講師の方々のお力を借りながら開催しました。食事の提供は予約制になりますが、サロンは申込不要。どうぞ、散歩の途中にふらっと立ち寄っていただければ幸いです。「ここに来ると、なんか楽しいし、ほっとする」そう言ってもらえるような、温かい居場所を皆さんと育んでいきたいと思っています。

コミュニティカフェ
ほっこりわくわく
毎月第1水曜日
10:30 ~ 15:00



詳しくはこちら



渡邊 康子さん

「和なはアートフード協会」認定講師の資格を持つフードクリエイターとして、あんこを使ったお花スイーツを製作・販売しています。市内に移住した当時は共働きで、仕事と育児に追われ、子どもたちとの時間が確保できず悩んでいました。そんな中、集落支援員とつながり、家族の後押しもあって「あんこのお花教室 世莉花」を開業しました。

現在は育児の合間を見ながら、月に数回、TAKIBIでマルシェやワークショップを開催しています。参加者の皆さんと会話を楽しみながら過ごす時間は、私の心を癒すもう一つの居場所です。回を重ねるごとに新たなつながりが生まれ、リピーターや市外・県外から訪れる方なども増えています。世莉花の活動を通じて TAKIBI を知っていただく方がいることもうれしく思います。

好きなことを続けながら、地域に貢献できるのは TAKIBI があったからこそ。これからも世莉花のお花づくりで、まちに彩りを添えていけるようがんばります。



あんこのお花教室
serica
世莉花



Instagram



私の心を癒すもう一つの「居場所」



田村 未来さん

自分らしく生きること



辻岡 千宙さん
(通称ちび)

留学中は、人種差別や文化の違いなども経験し、たくさんの壁を乗り越えました。そして自分と向き合い、学ぶことの楽しさに気づくことができました。その分、帰国後の自分にとって、今までと変わらない学校生活は、これまで以上に物足りなさを感じました。そんな時、登録していた「NPO 法人 とちぎユースサポーターズネットワーク」のインターンを通じて出会ったのが、矢板ふるさと支援センター TAKIBI でした。「いいね! やってみよう」そう言って私のアイデアを全力で応援してくれる TAKIBI スタッフの存在は、私の学校生活を支えてくれていると言っても過言ではありません。TAKIBI のみんなに出会えてなかったら、今頃矢板市に私の居場所はなかったかもしれません。

TAKIBI で過ごす中で、人とのつながりが大きな力になることを実感しました。将来のことはまだわからないけど、TAKIBI のように人の心に寄り添い、自分の笑顔でみんなを笑顔にしたいと思っています。「ちびの笑顔に元気もらったよ!」そう言ってもらえる存在になれるよう、これからいっぱい考えて、いっぱい悩みながら、自分らしく前に進んでいきます。



もう一つの「場」 スロークワーク矢板

矢板ふるさと支援センター TAKIBI がある商業施設「ココマチ」の2階には、市と地方創生に向けたコンソーシアム協定を締結しているシェアオフィス「スロークワーク矢板」があります。県外のビジネス利用者やイベントに参加する地域の方など、幅広い層の方々が利用しているほか、地域のにぎわいづくりを目的とした取組なども積極的に展開しています。

人のつながりを生む仕掛け「スロークワーク」

矢板に新たなコミュニティを創るイベント「スロークワーク」は、2023年から月に1回のペースで開催され、今月で第30回目を迎えます。毎回、さまざまなジャンルの専門家や、市長をはじめ地域で活躍する方々をゲストスピーカーに招き、参加者と意見交換を行っています。ファシリテーターを務めるのは、まちづくりやコミュニティづくりの分野で活躍する田口 真司さん。田口さんのファシリテートにより、参加者は自分の考えを深めたり、対話を通じて新たな気づきを得たりと、和やかな雰囲気の中でざっくばらんに意見を交わします。トークイベントの後には懇親会が開かれることもあり、参加者同士が親睦を深める場にもなっています。「スロークワーク」は、人と人がつながりながら、地域の未来やまちの活性化について考えるきっかけを提供しています。



地域に愛される場所を目指して

イベントやコミュニティ活動に使えるラウンジスペースでは、「スロークワーク」をはじめ、地域と連携したさまざまなイベントを開催しています。例えば、地域の高校生とコラボした親子教室では、矢板東高校リベラルアーツ同好会の生徒たちと一緒に、地域の親子がフードロスについて学びました。また、TAKIBI で月に1回開催されている「よりみち市」に合わせて、2階では地域の方による「よりみち小さな展示会」を開催。ふらっと立ち寄れる空間づくりにも取り組んでいます。

市外・県外からの人の流れを生み出すためには、まず地域の皆さんに愛され、にぎわう場所であることが大切だと感じています。そういった意味でも、1階に地域とつながる TAKIBI があることで、連携の幅や可能性が大きく広がっていることは、本当に心強いことです。下から聞こえてくるにぎやかな笑い声にはいつも癒されているし、シェアキッチンから漂うおいしいような香りに誘われて、私たちスタッフもつい足を運んでしまうことも。引き続きこれからも、TAKIBI との関係を楽しみながら、地域の皆さんを巻き込む新しいアイデアや仕掛けを生み出していきたいです。

また、シェアオフィスをさらに多くの方にご利用いただけるよう、市と協働しながら今の時代に合わせた新しい働き方の創出にも挑戦していきたいと考えています。



コンシェルジュ
吉成 麻子さん

コンシェルジュ
田代 香湖さん

SLOW TALK YAITA vol.30

日時／12月16日(火) 18:00～19:30

参加費／無料

ゲストスピーカー／

生涯学習課 社会教育主事 海瀬 裕之氏

ファシリテーター／

エコツェリア協会 (大丸有環境共生型まちづくり推進協会)

田口 真司氏



Guest

SLOW
WORK
YAITA



最新情報はホームページから
ご確認ください。



TAKIBIスタッフを紹介します

現在、運営を担う地域おこし協力隊と集落支援員は5人。個性豊かなメンバーが、それぞれに地域と向き合い、新しい出会いを楽しみながら、人と人のつながりを育んでいます。



TAKIBI センター長
地域おこし協力隊員
福田 麗さん

夢を応援する場所でありたい

ふらっと来る方や友達に連れられてくる方など、TAKIBIには毎日たくさんの方が出入りしていて、皆さんとの何気ない会話は私のエネルギーの源です。刺激をもらいながら、私も「ゲストハウス開業」という夢に向かって、日々試行錯誤しています。また、中高生が悩みを相談してくれると、頼りにされていることがうれしくて、ついやる気が出ちゃいます。若者の可能性は無限大。学びや気づきにつながればと思い、「やってみたい」と相談されたさまざまなイベントを、TAKIBIで実現させてきました。最初は友達に誘われて来た子が、一人でもふらっと立ち寄るようになったときは、本当にうれしかったです。「今日も立ち寄ってよかった」みんながそう言って集まる地域の居場所を目指しています。



地域おこし協力隊員
坂和 紀明さん

ここは矢板の魅力を発信する拠点

年に数回、県外で移住希望者に向けたイベントに出展しているほか、TAKIBIでは一年を通じて移住者の相談を受け付け、移住者と地域の方をつなぐ交流会なども開催しています。移住者と地元の方では市に感じる魅力がそれぞれ異なり、お互いに新たな発見や気づきにつながっています。

また、バスケットボールやサッカーの強豪校として知られる矢板中央高校があることも市の大きな魅力の一つ。連携した大会や教室を開催するなど、スポーツツーリズムにも力を入れ、交流人口の増加に挑戦しています。引き続きTAKIBIを拠点に地域の方を巻き込みながら、県内外の方々に市の魅力を発信していきます。

自分らしい地域支援のカタチを

私も11年前に移住した移住者の一人ですが、矢板市は自然が豊かで人が温かい場所だと感じています。集落支援員の仕事は、少子高齢化・人口減少に伴い、自然消滅的に薄れてきている地域のつながりを、今の時代に合わせて緩やかにつなぎ直すこと。「まずは知ること」と思い、各行政区のイベントに顔を出していますが、「誰よりも楽しんでいる」とよく言われます。

体を動かすことも好きだし、みんなが笑顔になることも大好きです。4月に就任してから、TAKIBIを通じて地域の方や市外で活躍する集落支援員さんなど、たくさんのお会いがありました。皆さんとのつながりを大切にして、私らしい地域支援のカタチで、地域に笑顔とにぎわいを増やせればうれしいです。



矢板地区集落支援員
三浦 留梨子さん

地域の子どもたちの成長を見守りたい

「育ち盛りの子どもたちが、お菓子やインスタント食品でおなかを満たす機会を少しでも減らせば——」そんな想いから集落支援員の発案で始まったイベントが、「矢板おむすび」です。地域の方からの寄付で集まった野菜やお米を使って、毎週水曜日の夕方にごはんを提供しています。開催して1年半が経ちますが、毎回豊富な食材で色とりどりのメニューが作れていることは、地域の愛のたまものだと感じています。

子どもたちには、地域の温かさに触れながら成長してほしいと思っています。ここで過ごした時間がふるさとの思い出の一つとして子どもたちの心に刻まれていたら何よりです。引き続き私自身も「ごちそうさま」の笑顔を楽しみに、TAKIBIのお母さんとして、愛情たっぷりのごはんを用意したいと思います。



泉地区集落支援員
遠藤 優美さん

地域と共にある子育てを

シェアキッチンはお試し開業や副業などを気軽にスタートできるほか、利用者同士の情報交換の場にもなっています。世代を超えた利用者同士のつながりが生まれ、その日限りのコラボメニューが誕生したり。皆さんのアイデアやバイタリティには驚かされることが多く、刺激をもらっています。

また、地域のイベントのお手伝いなども参加していますが、イベント当日は育児と両立しながら親子で参加し、経験豊富な地域の方々とふれあうことで、学びと元気をもらっています。

少子高齢化が進み、各地域の自治会の在り方にも課題が見られますが、持続可能な地域づくりを模索しながら、地域と共にある子育ての楽しさを伝えられるような存在になりたいです。



片岡地区集落支援員
長田 彩乃さん



TAKIBIで
生まれた
小さな出会い



TAKIBIスタッフ
人と人をつなぐ “架け橋”

宇都宮大学地域デザイン科学部では今年度より、矢板ふるさと支援センター TAKIBI に社会教育実習の学生の受け入れをお願いしています。学生たちは、地域の方々と関わりながら“まちづくりのリアル”を体験し、貴重な学びの場を提供いただいています。

まちづくり・にぎわいづくり・ひとづくりにおいて大切なこと、それは『人と人をつなぐ架け橋になる人がいること』。

「熱い想いを持っている人」

「やりたいことがある人」

「楽しいことが好きな人」

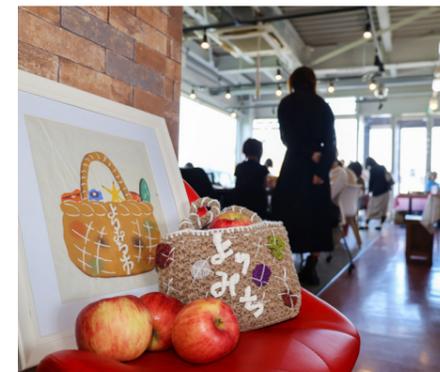
そんな人が、あっちにもこっちにもたくさんいれば、「何もなくても自然ににぎわいが生まれる」と思うかもしれませんが、実はそうではありません。どれだけ熱量の高い人がいても、その人たちが「集う場所」と彼らを「つなげる人」がいないと、そのエネルギーはうまく融合されません。また、「つなげる人」だけがいても、熱量や能力を持った人が集まる場所がなければ、やはり何も起きません。

その点で、TAKIBI は、「集う場所」であり、運営スタッフは、「つなげる人」です。そして何より TAKIBI の最大の価値は、さまざまなカラーを持った運営スタッフがいて、自立していること。

TAKIBI では、小学生がゲームを楽しみ、高校生が勉強し、主婦の皆さんがマルシェを開き、高齢者の方がサロンに集います。世代も立場も異なる人たちが入れ替わりながら訪れ、自然と交流が生まれています。まさに、スタッフ一人ひとりの魅力に引き付けられて、人が集うことの積み重ねによって生まれたものです。こうしたにぎわいの連鎖が広がっていくことこそ、矢板市の大きな強みであり、このまちの確かな魅力になっていくと感じます。



一緒に過ごす時間を
少しずつ
積み上げていく



出会うの連続が
新しいアイデアを生み
まちを照らす灯となる



宇都宮大学
地域デザイン科学部 コミュニティデザイン学科
准教授 若園 雄志郎さん

今日はTAKIBIで何する？

さあ TAKIBI へ行ってみよう
きっと笑顔になれる何かが始まる
いつもの5人が、
地域みんなが、
あなたとの出会いを待っている

TAKIBIで、あなた色の灯を見つけよう
そして今、
矢板のまちで、あなたのストーリーが始まる——

